

中世から近世へ——十六・十七世紀の思想史的課題——

伊 藤 聡

日本列島に住む人々の死生観・人間観・宗教観は、中世から近世へと移行する中で大きく変貌した。その時期はおおよそ十五世紀後半から十七世紀前半で、応仁の乱にはじまる大名による分国統治の時代から豊臣秀吉の天下統一を経て徳川氏の幕藩体制の確立期に相当する。この移行期の政治・社会・経済・対外関係の変化については、歴史学では厚い研究蓄積を持つが、思想史研究の分野でその時期の意義について十分に追究されてきたとは言いがたい。その大きな理由のひとつは、中世と近世では研究者集団が異なっていたため、狭間にあるこの時期の研究が手薄となってしまうていたからである。

文学・文芸研究においても、この時期は重要な文芸作品がなかったこともあり、前後の時代と比べて等閑視されるきらいがあった。ところが近年、その重要性が再認識されはじめている。先駆的には林屋辰三郎が一九五三年に『寛永文化論』（『中世文化の基調』東京大学出版会、一九五九年）を発表、寛永年間（一六二四～四四）の文化を以て「日本中世の創造的文化の終点であると同時に、伝統的文化の起源である」と提言した。これを承けて熊倉功夫は『寛永文化の研究』（吉川弘文館、一九八八年）において具体的に展開してみせた。ちかごろでは、鈴木健一が「十七世紀の文学——その多様性」（『文学』二〇一〇年四月）の中で、慶長から寛永年間までに範囲

を拡げて、中世文化が近世文化へと切り替わる時期と主張した。鈴木はさらに、編著『形成される教養——十七世紀日本の〈知〉』（勉誠出版、二〇一五年）を上梓し、十七世紀の文芸・学問史的意義を追究した。

十六世紀については、二〇一二年刊行の『文学』（岩波書店 誌上において「特集Ⅱ十六世紀の文学」が編まれた。その中で編者の小峯和明は、冒頭の辞のなかで、十六世紀は後世のカノンになり得るような作品を生み出さなかったものの、あらたな文学の叢生をもたらした時代だったとし、特徴として以下の八つを挙げた。①歴史叙述の更新（軍記・戦記の叢生と『平家物語』『太平記』のカノン化）、②知識人の地方下向による文化の多極化、③キリスト教を中心とする西洋文化との接触、いっぽう世界における日本の〈発見〉、④キリスト教を含む宗教文化の多様化（鎌倉仏教の権門化・巨大化、神道の独立、宗論の激化、教えの俗化・大衆化）、⑤古典学（『古今』『伊勢』『源氏』）の隆盛、⑥物語・語り物・芸能（能・幸若舞・古浄瑠璃・説経節）の隆盛、⑦メディア（出版文化）とイメージ（参詣曼荼羅・観心十界曼荼羅のような大画面図像）の変革、⑧東アジアとの交流（対外交易の拡大と侵略戦争）、である。

十六世紀を中心とした室町時代文芸については、近年古典注釈・漢文学・芸能史などの方面から多くの研究が蓄積されつつある（小川剛生、堀川貴司、鈴木元、小林健二等）。これは日本史学における室町時代研究の進展とも連動するものであった。諸分野における研究成果をもとにして、〈知〉の変容という視点から室町から近世初期の文化を総合的に追究しているのが中世文学研究の前田雅之である。前田は、『中世の学芸と古典注釈』（中世文学と隣接諸学第五卷、竹林舎、二〇一一年）、『もうひとつの古典知——前近代の知の可能性』（勉誠出版、二〇一二年）などで、中世から近世前期における古典注釈、漢文学の諸相を横断する編著を公刊したが、近頃室町時代の〈知〉の包括的に組上に載せることを目論んだ編著『画期としての室町——政治・宗教・古典学』（勉誠出版、二〇一八年）を出した。

このように文学研究の分野では、近世と中世双方より、移行期である十六〜十七世紀の問題が重要な研究主題として立ち現れている。しかも、そこで研究対象となっているのは、狭義の〈文学〉ではない。学問・思想・宗教を含む〈文事〉全域に及んでいるのである。

今回、シンポジウムのテーマとして、「中世から近世へ」を採り上げたのは、日本思想史学においても、この問題が検討するに値すると思われるからである。中世から近世に移行する中で、日本人の心性がどのように変化したか、あるいはどのようなところが変らずに受け継がれていったのかは、思想的にも追究される必要がある。

しかしながら、中世の思想史研究者と近世のそれとは、共通の土俵に立って考えることをこれまで余りしてこなかったように思える。それは、中世は仏教、近世は儒学が研究対象の中心だったことが大きい。しかしながら、近年中世儒学については、古典学や漢文学・国語学の専門家による研究が拡大しつつあるし、いっぽう近世仏教についてもようやく光が当たりはじめている。

今回のシンポジウムでは、中世と近世の専門家に、それぞれの立場から、中世から近世への移行期の問題を論じてもらおうと思っている。発表者は、前田雅之・下川玲子・齋藤公太の三氏である。前田氏は、先にも触れたように、現在中世から近世への移行期の問題を学問史・文学史の立場から先導している方である。思想・文芸にまたがる広い視野から、この問題を論じていただけたらと思う。下川氏は『北畠親房の儒学』（ベリカン社、二〇〇一年）において、中世儒学の問題を論じ、近年でも『朱子学的普遍と東アジア——日本・朝鮮・現代』（ベリカン社、二〇一一年）等で、中世から近世にかけての朱子学の問題を追究されている。中世儒学と近世儒学の関係について論じていただくことを期待する。また、齋藤氏は、ちかごろ『神国』の正統論——『神皇正統記』受容の近世・近代（ベリカン社、二〇一九年）を上梓した新進である。本書は『神皇正統記』という中世に成ったテキストが、近世・近代にどのように受容され解釈されたかを論じたもので、今回の発表でも近世における中世的なものの受容という観点から、中世から近世への転換を論じていただけたらと思う。

コメンテーターには、兵藤裕己、アンナ・アンドレーワ氏をお願いしている。兵藤氏は『太平記』を専門とする中世軍記研究者であるが、それ以外に（語り）や王権や共同体の問題など、多くの課題について論じてきておられ、数多くの著作がある。今回も各発表をもとにあらたな問題提起を行っていただけるものと思う。アンドレーワ氏は、海外における日本中世の神仏習合信仰研究をリードしている研究者のおひとりで、二

〇一七年には三輪流神道を総合的に論じた大著 *Assembling Shinto: Buddhist Approaches to Kami Worship in Medieval Japan* (Harvard University Asia Center) を上梓された。また、東アジアの胎生思想を巡る論考を集めた *Transforming the Void: Embryological Discourse and Reproductive Imagery in East Asian Religions* (Brill, 2015) の編者でもある。宗教思想、さらに海外における日本研究者の立場からコメントをいただけるだろう。

このシンポジウムを通じ、中世・近世の思想研究が有機的に結びつき、さらに現在進行している他分野の成果を思想的問題として引き込んでいければと考えている。

(茨城大学教授)